

## 国力とは何か。

鎌田昭良

防衛省のような組織に長く勤めていたからかもしれませんが、時々、国の力の源泉とは何だろうかと考えることがあります。

国力の要素として直ぐに頭に思い浮かぶものは、「軍事力」「経済力」「技術力」「国土の広さ」「資源量」「人口」などと言ったものだと思いますし、ちょっと前には、その国が有する文化的な魅力などの「ソフトパワー」も国力の要素として考慮すべきとの議論もありました。

しかしながら、塩野七生さんの大著『ローマ人の物語』を読むと、上記のような外形的な要素のみを国力の源であるとするのは、浅薄な見方であることに気づかされます。塩野さんは、『ローマ人の物語』第1巻の冒頭で、この長編の物語を書き始めた動機を次のように述べています。

「古代のローマ人は、知力ではギリシア人に劣り、体力ではケルトやゲルマン人に劣り、技術ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣っていた。それなのに、なぜローマ人だけが、あれほどの大を成すことができたのか」この大いなる疑問を解き明かすために、15巻にもおよぶ古代ローマの歴史を書き始めることにした。

塩野さんは、この疑問に対する答えの探索は読み手に委ねているので、本のどこかに明確な形で解答が書かれているわけではないのですが、私の解釈では、解答のヒントはローマが採用した「敗者の同化」政策にあるように思います。

ローマは、自らに敵対する相手とは徹底的に戦いますが、相手を打ち破った後では、「敗者」に対して、その国の政治や文化を尊重するだけでなく、勝者であるローマと同等の地位を与えました。敗者を根絶やしにするのは、ローマ流ではなく、むしろ「寛容」や「度量の大きさ」を示すことで、敗者を同化させていくことが、ローマ人の手法でした。このような

ローマ人の精神こそ、ローマを巨大な帝国に成長させた力の源でした。

塩野さんの本を読むと、こうしたローマの精神を一番体現していた人物は、あのユリウス・カエサルであり、彼は、例えば、征服したゲルマンの部族長をラテン語も話せないのに、どんどんローマ政治の中核である元老院の議員に登用していったと伝えられています。その結果、ローマ帝国が繁栄を謳歌した「五賢帝時代」には、その五賢帝の何人かは、ローマ植民地であった属州からの出身者でした。これを譬えて言えば、イギリスが「七つの海」を制覇していた時代に、イギリス本国の総理大臣にインド出身の人物になるようなもので、そう考えてみれば、ローマの度量の大きさというものには驚かされるものがあります。

現在、ヨーロッパの主要国では、イスラム諸国からの移民を社会に溶け込ませることに多くの課題を抱え、それが多くのテロの温床になっていると言われていますが、かつてのローマの度量の大きさを見ると、我々は二千年前のローマ人から学ぶべきことが多いように思います。

かつて、今は亡きある防衛省の先輩から「目に見える氷山の上には真実はない。真実は水面下に隠されている」と教えられたことがあります。ある国の国力を考える上でも、より重要な要素は、軍事力や経済力などといった外形的なものではなくて、それを生み出しているその国の「内面的な精神」ではないでしょうか。

(この論考は、平成29年6月22日の朝雲新聞に、「前事不忘 後事之師」(第16回)として掲載されたものです。)